

05 ラヴェンナ (イタリア)

環境の「静けさ」を考える



●静かな街

ラヴェンナは「静けさ」に支配された街である。

広場でも通りでも、賑わいはあっても喧噪はなく、駅前ですえも整然としており、玉石によって舗装された道も清潔で、穏やかな安心感が漂っている。自転車がきちんと整理され、公共のレンタルシステムがある。盗まれたり、車が信号を無視したりするところでは実現できないことだ。

自転車が走るということは、街に起伏がないことを示している¹⁾。ラヴェンナは、その起源が古代ローマの軍港に発しているように、海に近く、坂が全くない。この街はポー川下流域のデルタ地帯にあり、この土地の条件ゆえに舗装の石が丸く、大きな石は産出されない。建物はほとんどすべてがレンガでつくられている。それゆえに、街の景観は平たく、こげ茶色で、地味である。そこにはローマのような、ダイナミックで、飾りの多い、壮麗な景観はない。ラヴェンナの街を歩いてその建物から感じるのは、おとなしく、慎み深い、安らかな表情である。しかし、そのレンガの積み方や、小さな石を敷きつめた路面は、こまやかで、ていねいな、内に秘めたメッセージを発している。

●教会のふたつの形式

建築史上におけるラヴェンナの重要性は、完全な形で残るいくつもの初期キリスト教の教会にある。ローマ帝国末期、313年にキリスト教が公認された

あと、帝国は東西に分かれ、5世紀、ラヴェンナは西ローマ帝国の首都となる。帝国が解体したあとも約2世紀にわたって繁栄した。この時期に珠玉の教会が建設されたのである。

ラヴェンナに残る初期キリスト教の教会群はふたつの形式に大別できる。第1はバシリカ式。奥行きのある細長い平面をもち、一番奥にアプスという半円形の円蓋をもった空間がつけられる。ここは数段高くつくられ、司祭が立つ。内部では奥に向かう軸性を感じる。集会施設として適した平面である²⁾。サンタポリナーレ・ヌオーヴォ(496年)、サンタポリナーレ・イン・クラッセ(549年)などがこれにあたる。第2の教会形式は集中式。円形または八角形の平面をもち、天井はドームで、周囲を壁で囲まれているから、内部では非常に強い中心性を感じる。洗礼堂としてつくられることが多く、少人数による儀式に適している。ネオン洗礼堂(450年頃)、アリウス派洗礼堂(500年頃)、そして集中式としてはきわめて大きく最高傑作とも言えるサン・ヴィターレ(547年)などである。

ラヴェンナ以後の建築史では、このキリスト教の教会のふたつの形式の選択あるいは調整が長い歴史の課題となる。それぞれがもつ機能上、空間上の利と欠とをどのように考えたか、この問いに対する解答が建築となって現れた。ラヴェンナの教会は、その問いの出発点であり、また、ヨーロッパというひとつのまとまりの認識を、ローマ世界というものさ



図1 子供を乗せて自転車に乗る夫婦 街全体が穏やかな安心感につまみられている



図2 サン・ヴィターレの外観 2重になった八角形の平面からなる

*1 イタリアではラヴェンナやフェラーラのあるエミリア・ロマーニャ州、大建築家パラディオの街であるヴィチエンツァのあるヴェネト州などで自転車がよく見られる。

*2 もともとバシリカとは古代ローマの集会施設を指す言葉である。

*3 文献②,p.58

*4 サンタポリナーレ・ヌオーヴォでは身廊上部(クリアストーリー)の両側に、サンタポリナーレ・イン・クラッセでは正面のアプスとスパンドレルの全面に、洗礼堂では天井のドームに、サン・ヴィターレでは特異なかたちの内陣とアプスの高く見上げるすべての壁面に、それぞれモザイクの壁画が見られる。

*5 ラヴェンナで最古の建築物のひとつと言われるギリシャ十字平面の小さな霊廟。サン・ヴィターレのとなりに建つ。

しからキリスト教世界というものさしへと転換した原点なのである。

●モザイクの光

ラヴェンナの教会は、外観はどれもレンガでわずかに入口付近などに大理石が使われる程度である。レンガの積み方によって現れる柱形、梁形からなる構造むきだしの立面は、装飾を排した近代的な表現にすら見える。

内部に入る。すると夢の世界が待ち受けている。「そこで来訪者は、物理的法則によって支配されたいま一つの地上的空間に入るのではなく、質的に異なった世界に移されたと感じるのである。」*3

モザイクの輝きだ。小さなピースからなる気の遠くなる作業の果てに、金色に輝く大壁画が構成されている*4。その輝きは射るような光ではなく、表面の微妙な凹凸による、きらきらとまばゆい煌めきである。決してけばけばしくはなく、外観から受けた厳格な印象は、表現はまったく違って薄れることはない。それはおそらく「静けさ」に関する異なったふたつの理由による。第1は小さなピースをひとつひとつ詰め込んでいった、畏るべき誠実さ、とでも形容したい「静かな」仕事ぶりを目の当たりにするからである。外壁や路面から感じられたメッセージは内部において証明されるのである。第2の理由はモザイクという方法の平面性によるものだ。それは壁もドームも連続して覆い、構造的な陰影と建築



図3 ガッラ・プラチディア廟のモザイク 古代ローマの面影が残る表現(文献①)

●参考文献

①ジョセッペ・ボヴィーニ『ラヴェンナ 芸術と歴史』LONGO-RAVENNA,1998

②クリスチャン・ノルベルグ=シュルツ, 前川道郎訳『西洋の建築 空間の意味と歴史』本の友社,1998

③日本建築学会『西洋建築史図集』彰国社

④『イタリア旅行協会公式ガイド2 ヴェネツィア/イタリア北東部』NTT出版,1995

的な重さを消してしまう。この軽やかさや表面性は、物質感や立体性といったダイナミクスの対局にある「静か(スタティック)な」感覚である。

●新しい環境の考え方

教会のモザイクをつくられた順に追って見ていくと、しだいに描かれた人物は正面を向き、動きがなくなり、動物や樹木も左右対称に配されることに気づく。しだいに影を表現しなくなり、輪郭線が強調されて、画面は「静けさ」を増してくる。ネオン洗礼堂とアリウス派洗礼堂では同じ「ヨハネによるキリストの洗礼」が描かれているが、わずか数十年の差でヨハネは前を向き、キリストは中央に来る。この違いは、ガッラ・プラチディア廟(450年頃)*5の聖人と羊たちの図と、それから約100年をけみしたサンタポリナーレ・イン・クラッセのそれとを比較するとよりはっきりする。前者では人物は身をひねり、羊は立ったり座ったりしているのに対し、後者では人物は正面で両手を広げ、羊は皆同じ模様のようなのである。100年後の画面の「静けさ」は明らかである。

なぜ、このように描き方が変わったのか。歴史のなかではものの見え方が変わる時期が何度かある。それは新しい世界観の出現であり、人間をとりまく環境に対する考え方が変わったことを意味する。こうしてラヴェンナの「静けさ」は、古代の享樂から離れて、長い中世という時代がはじまることを示しているのである。



図4 サンタポリナーレ・イン・クラッセの内部 正面アプスのモザイクは中世に通じる静かな表現